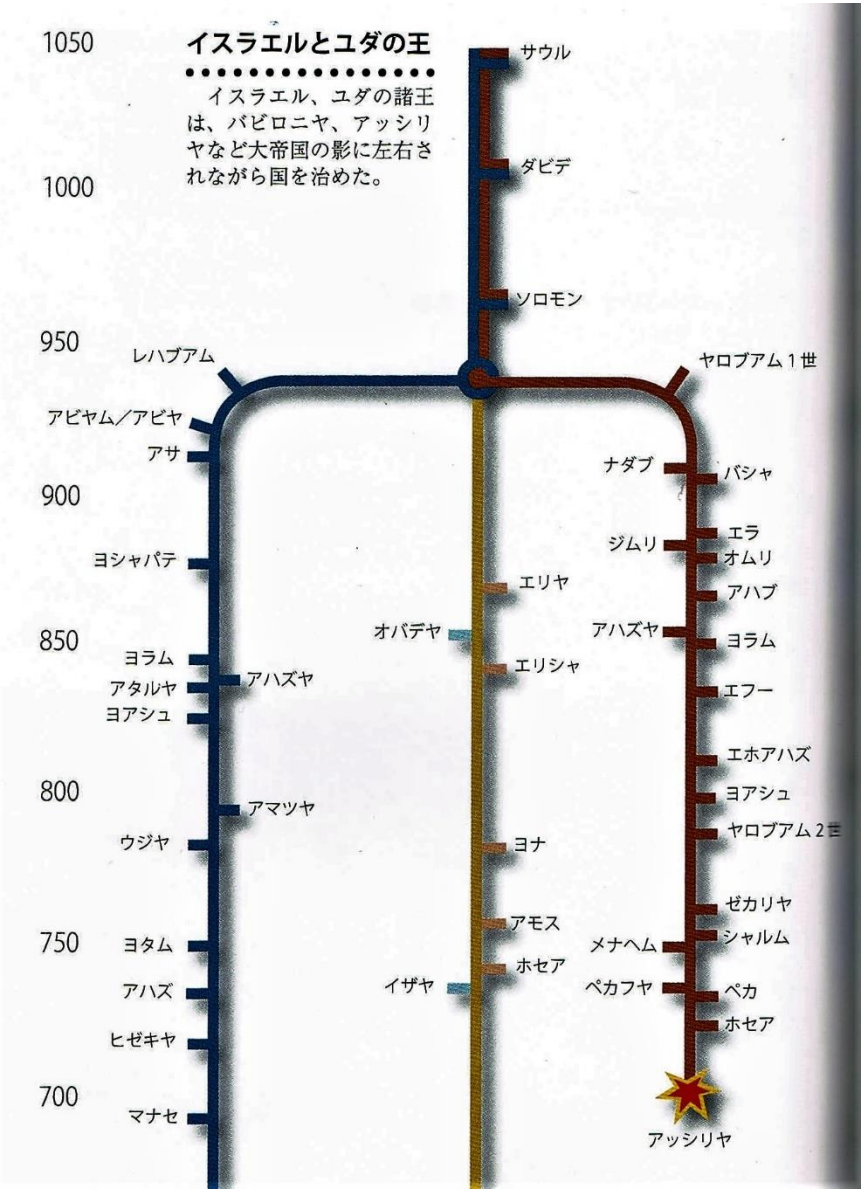

2023年2月26日　説教「聖霊が臨まれるとき」

列王記第二9章14～26節

先週は9章1～13節を通して、北王国イスラエルの不信仰がはびこるなかに、王家ではないエフーという隊長に油が注がれ、王への道へと進ませられます。エフーはヨラム王の父アハブとイゼベルの偶像礼拝を一掃せよとの使命をさずけられました。周囲もエフーを援護し始めました。

1．エフーの謀反（14～16節）

①謀反（14）**「こうして、ニムシの子ヨシャパテの子エフーはヨラムに対して謀反を起こした。―ヨラムは全イスラエルを率いて、ラモテ・ギルアデでアラムの王ハザエルを防いだが、」**エフーは北王国イスラエルのヨラム王に謀反を起こします。一方、ヨラム王はアラムとの戦いのためラモテ・ギルアデまで行き、アラムの王ハザエルの攻撃を防ぐために、自ら陣頭指揮にあたっていました。

②ヨラムの負傷（15）**「ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにアラム人に負わされた傷をいやすため、イズレエルに帰って来ていた―エフーは言った。『もし、これがあなたがたの本心であれば、だれもこの町からのがれ出て、イズレエルに知らせに行ってはならない。』」**しかし、ヨラム王はその戦いの最中に負傷してしまい、イズレエルまで戻らざるを得ませんでした。こうした背景の中、エフーは部下達に、謀反が事前に知られないように申し渡しました。

③エフーはイズレエルに（16）**「それから、エフーは車に乗って、イズレエルへ行った。ヨラムがそこで床についており、ユダの王アハズヤもヨラムを見舞いに下っていたからである。」**その時が来て、エフーは車に乗って、療養中のヨラムがいるイズレエルに向かいました。折しも、南王国ユダのアハズヤも見舞いに来ているということで、今や内外に自らの企てを知られることを見込んで、その日に出発したのです。

2．イズレエルに迫るエフー（17～20節）

①やぐらの上に（17）**「イズレエルのやぐらの上に、ひとりの見張りが立っていたが、エフーの軍勢がやって来るのを見て、『軍勢が見える』と言った。ヨラムは『騎兵ひとりを選んで彼らを迎えにやり、お元気ですかと、尋ねさせなさい。』と言った。」**ヨラム王のいるイズレエルの物見やぐらには、見張りが立っていました。彼はどこかの軍勢がやって来るのを認めました。ヨラムは様子伺うために騎兵一人を送りました。

②騎兵を送り（18）**「そこで、騎兵は彼を迎えに行って言った。『王が、お元気ですかとたずねておられます。』エフーは言った。『元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。』一方、見張りは報告して言った。『使者は彼らのところに着きましたが、帰って来ません。』」**命を受けた騎兵は、エフーの所にでかけ、ヨラム王が「お元気ですか」（何か変わったことがありますか）と尋ねている旨を伝えます。するとエフーは、その言葉を退けて、自分に従うように命じま

す。見張り台の者は、使者が戻ってくる様子がないと伝えました。

③車の御し方はエフー（19～20）「そこでヨラムは、もう一人の騎兵を送った。彼は彼らのところに行って言った。『王が、お元気ですかと尋ねておられます。』すると、エフーは言った。『元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。』」　見張りはまた、報告して言った。『あれは彼らのところに着きましたが、帰って来ません。しかし、車の御し方は、ニムシの子エフーの御し方に似ています。気が狂ったように御しています。』」ヨラム王は事態をまだ適確に理解しておらず、さらに騎兵を一人送り、それとなく用件を尋ねたのです。するとエフーは、これを退けます。そして、自らに従うように命じます。見張りは、騎兵が帰ってこないことと、車を御している人は、イスラエル軍の隊長であるエフーに似ていると報告しました。

３．車のなかに倒れたヨラム王（21～26 節）

①エフーとヨラム王（21～22）「ヨラムは、『馬をつけよ』と命じた。馬を戦車につけると、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは、おのおの自分の戦車に乗って出て行き、エフーを迎えに出て行った。彼らはイズレエル人ナボテの所有地で彼に出会った。ヨラムはエフーを見ると、『エフー。元気か』と尋ねた。エフーは答えた。『何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。』使いの騎兵がもどない事を受け、ユダの王ヨラムは自ら、戦車に馬をつけ、エフーの所に向かいます。ユダ王アハズヤもそれに伴いました。そして、ナボテの所有地（かつてアハブとイゼベルがナボテから奪い取ったぶどう畑/一列王21章）で会いました。「エフー。元気か」。この問いに、エフーは、これを退け、ヨラムの母の姦淫と偶像礼拝の蔓延を指摘します。

②心臓を射抜き（23～24）「それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに、『アハズヤ。悪巧みだ。』と叫んだ。エフーは弓を力いっぱい引き絞り、ヨラムの両肩の間を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は車の中にくずれおれた」この言葉を聞いたヨラムは身の危険を感じて、背走します。エフーは弓を弾き、ヨラム王の心臓を射抜きました。ヨラム王はくずれおれました。

③ナボテの畑で（25～26）「エフーは侍従のビデカルに命じた。『これを運んで行き、イズレエル人ナボテの所有地であった畑に投げ捨てよ。私とあなたが馬に乗って彼の父アハブのあとに並んで従って行ったとき、主が彼にこの宣告を下されたことを思いだすが良い。≪わたしは、きのう、ナボテの血とその子らの血を確かに見届けた。―主の御告げだ―わたしは、この地所であなたに報復する。―主の御告げだ―』それで今、彼を運んで行って、主のことばのとおり、あの場所に彼を投げ捨てよ。」エフーは侍従に、ヨラムの死体をナボテの畑に投げ捨てよ、と命じますが、Ｉ列王21:19にある通りでした。主の御告げの通りになったのです。

《結論》使徒パウロは、パリサイ派の学者であり、キリスト教徒を迫害する活動家でありました。ローマ市民権を持つユダヤ人でした。そんなパウロが選ばれて、キリスト教徒となり、福音宣教をし、たくさんの教会の建て上げをしました。国際経験のあるユダヤ人であったことが選ばれた理由の一つでしょう。

エフーが王に選ばれていった理由の一つは、彼がヤロブアム以後の北王国イスラエルにあって、王家の流れの人ではなかったということです。特に、ヨラム王の父であるアハブ王とイゼベルとは血縁的な関係がなかったということです。既に列王記から読んできたように、アハブは妻イゼベルから偶像崇拝の影響を受けていました。また、実際的な事柄においても、ぶどう園の主人であるナボテを石打ちにして殺し、ぶどう畑を奪い取るなどの悪辣なことをしてきました。しかし、そのことを主より指摘されたアハブ王は悔い改め、預言者エリヤを通して、そのへりくだりを認められて、わざわいから免れるという出来事がありました（Ｉ列王記 21 章）。それほどに主はイスラエルの国を愛し、アハブにもご忍耐をもって見守ってくださっていたのです。

しかし、今ここに至って、主はアハブとイゼベルの家の不信仰は一掃することになったのです。異邦人伝道には、12 弟子達ではない、パウロである必要があったように、王家の親族ではその使命を果たすことはできなかったのです。親族であれば情に流される心配はあります。この章において、二人の騎兵への対応はともかくとして、ヨラム王自身に対して、エフーはまっすぐに言うべきことを述べています。ヨラム王の『エフー。元気か』と挨拶を述べたのに対し、エフーは『何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。』と激しく立ち向かっています。預言者以外の誰がアハブにこのような直言ができたでしょう。普通なら、王に会うだけで怖気づいてしまうところです。彼が王の家の親族ではなかったことは大切だったのです。それに何と言っても、重要な事は、神が彼に働いてくださったということです。彼が職務を行うためには、信仰にから来る、神の促し、神からの任務だという意識が押し出す力だったのです。

復活の主イエス・キリストは昇天する直前に「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。」（使徒 1:8）と言われました。私たちが働きをなすというときに何が大切でしょうか。それは聖霊が私たちのうちに働いてくださることでありましょう。アハブはイゼベルと結託してバアル信仰に進みましたが、それは真の神に背を向けることでした。悪霊の思う壺でありました。彼は権力によって、民の上に立っていました。「彼の生きている間は、わざわいを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわいをくだす」（Ｉ列王 21:29）という言葉の通りに、アハブの子ヨラムは、思いがけなくも、エフーによって滅ぼされることになりました。パウロはキリストを知ることの価値のゆえに、この世の人々が誇るものをちりあくたと思うようになったと述べています（ピリピ 3:8）。主の前に謙遜になり、聖霊の働きを待望していく姿勢が、私たちの日々の歩みにおいて、重要なのです。聖霊の主の力が私たちの上に豊かに注がれていきますように。